



JAFCOF 釧路研究会
リサーチ・ペーパー vol.8

炭鉱マンから行政マンへ

—元庶路炭砒労組保安部長 住谷正治氏による講演の記録—

編集：

笠原 良太 早稲田大学大学院文学研究科
kasahara_2369_bz@ruri.waseda.jp

石川 孝織 釧路市立博物館学芸員
i-takaori@nifty.com

嶋崎 尚子 早稲田大学文学学術院教授
nshim@waseda.jp

2016 年 8 月 31 日

目次

はじめに	1
------	---

住谷正治氏講演「炭鉱マンから行政マンへ」

1. 炭鉱マンになるまで—激動の 10 代—	3
はじめに	
父の死、鉄工所に就職	
働きながら定時制高校に通う	
炭鉱に転職	
2. 炭鉱マン時代	10
(1) 炭鉱での仕事と高校生活の両立	
入社当初一通気夫としての仕事—	
運搬夫へ異動—二番方を免除してもらう—	
「働こう学ぼう運動」	
全日制高校設立にむけた作業	
生徒会長としての活躍	
同期の転職	
(2) 労働組合での活躍	
立坑建設による配置転換—職場幹事の仕事—	
「強い労働組合」の執行部を務める	
坑内火災への対処	
石炭政策転換闘争に参加	
(3) 庶路炭砒の閉山	
関連企業への就職を断る	
早稲田出身の労働課長	
3. 行政マン時代	23
町役場に再就職	
教育委員会に配属	
社会教育主事資格の取得—北海道大学での講習会—	
元炭鉱マンから見た行政マン	
道民の船、釧路分団長を務める	
社会課へ異動	
その後のキャリア	
4. おわりに：サミュエル・ウルマン「青春」	31
参加学生の感想	34
明治鉱業庶路砒業所（庶路炭鉱・本岐炭鉱）について（石川孝織）	39
解題（笠原良太）	40
おわりに（石川孝織）	45

は じ め に

2015 年 6 月、北海道白糠郡白糠町西庶路在住の住谷正治さんと出会い、1964 年 1 月に閉山した明治鉱業庶路炭砦の様子と地域のその後について伺う機会を得ました。その包容力に満ちたお人柄に圧倒・魅了され、その背景に、住谷さんご自身がたどられた決して平坦とは言えない人生経験があることを理解しました。そこで、若い学生たちへの講演をお願いしたところ、幸いなことに、ご快諾いただきました。

講演は、2015 年 10 月 5 日に早稲田大学文学部社会学コース嶋崎ゼミ「“生きている炭^{ヤマト}鉱”と釧路研究」フィールドワークの一環として、学部 3 年生、4 年生を対象に、道の駅しらぬか恋問「恋問館」で行われました。予想に違わず、住谷さんのお話は学生たちを強く引き付けるものでした。私どもは、この講演を記録として残すことが肝要と考え、本釧路リサーチ・ペーパー Vol.8 として刊行することといたしました。本書には、講演記録のほかに、学生たちの感想、明治鉱業庶路炭砦の概説、解題を合わせて所収しています。

なお講演後に、住谷さんのご案内で庶路炭砦跡地を巡検しました。その様子については、2015 年度報告書『“生きている炭砦”と釧路研究Ⅲ』（2016 年 3 月刊行）に記録を掲載していますので、ご参照ください。

住谷正治さんには、ご講演いただきましたこと、さらに講演録刊行のご快諾ならびに丁寧にご校正いただきましたことに深く感謝申し上げます。また、当日は、白糠町女性ボランティア会の皆さまに地元名物の秋あじ鍋をご用意いただき、たいへん美味しく頂戴しました。ありがとうございました。

2016 年 8 月 31 日

早稲田大学文学学術院教授
嶋崎尚子

住谷正治氏プロフィール

1938 年北海道生まれ。1953 年庶路中学校卒業後、鉄工所に勤務しながら北海道白糠高等学校定時制課程に通う（1957 年卒業）。1956 年明治鉱業株式会社庶路鉱業所（庶路炭砦）に転職。1963～64 年庶路炭砦労働組合執行部保安部長を務める。閉山後、1964 年に白糠町役場職員として再就職。1999 年白糠町収入役で退職。退職後、白糠町新朝日町内会長を 2 期務める。

付記

- ・ 本書掲載の写真の一部は、住谷正治氏が撮影されたものを使用しています。今回の掲載にあたってご提供いただきました。
- ・ 本書掲載の講演内容は、追加インタビュー（2016年3月実施）ならびに石川孝織学芸員による事前インタビュー記録（2013年実施）から一部補足されています。
- ・ 本編の編集は、笠原良太（早稲田大学大学院文学研究科）が担当しました。
- ・ 本講演の開催にあたっては道の駅しらぬか恋問「恋問館」にご協力いただきました。感謝いたします。

「炭鉱マンから行政マンへ」

お話：住谷 正治氏（元庶路炭鉱労働組合保安部長、元白糠町収入役）

1938 年、中標津町上武佐生まれ

講演日：2015（平成 27）年 10 月 5 日

1. 炭鉱マンになるまで—激動の 10 代—

はじめに

住谷：改めまして、おはようございます。自己紹介をさせていただきます。福山雅治（フクヤマ マサハル）、いや、住谷正治（スミヤ ショウジ）といいます。年齢は、パチンコ屋が喜ぶような数字、77 歳です。フィーバーです。もう間もなく 78 になろうとしております。

今日は、石川先生からお話があって、みなさんが炭鉱の歴史について勉強するということで、話すことになりました。去年はみなさんの先輩たちが阿寒町にある雄別炭鉱を見てきたそうですね。今は病院の跡が残っておりますが、亡霊が出るという噂があるところです。でも、庶路炭



講演する住谷氏

2015（平成 27）年、大学院生清水撮影

鉱にはそういう噂はありません。ただし、熊がちょいちょい出ているみたいです。実際に出くわしたことはありませんが、何回か行ってみると、熊の糞や足跡がありました。

実は、炭鉱が閉鎖になってから、炭鉱の親会社である明治鉱業がその場所を王子製紙、今の「王子マテリアル」に全部売ってしまったわけです。ですから、今は王子マテリアルの財産になっているので、お断りしなければ中に入っていくことはできません。ゲー

トを作って、「無断入林禁止」と書いてあります。しかし、山菜採りに行く人たちがそれを壊してしまって、何回作ってもすぐに壊されて、イタチごっこなのです。私は山菜採りに行ったことないですけども。まあ、今はそういうところです。今は、ほとんど人が行かないものですから、雑草がたくさん生えています。

それから、ここ（道の駅しらぬか恋問「恋問館」）のガラスを見てください。これは、海が荒れたときの潮風に乗って海水が吹きつけられて、こういうふうになり白くなります。何度拭いてもだめです。ですから、この沿線に並んでいる家のテレビのアンテナとかは、塩害で錆びてしまって 1 年ぐらいしかもちません。そういうところで生活している人たちは大変なのです。

そこで、うちの町を少し紹介させていただきます。人口は大体 8,400 人、それから世帯数が 4,200 ちょっとからいのちっぽけな町です。でも、道内で最初に石炭が掘られたというのが、私の町です。私の家のすぐ隣にある「西庶路コミュニティセンター白糖炭田石炭資料室」という施設に、故事来歴が書かれたものがあります。安政年間に石炭が最初に掘られて、たいした港もなかったと思いますが、白糖の港から船に積んで函館に運んだという歴史が文献のなかにあります。

そこで炭鉱のことを話すといっても、みなさんは事前に勉強していると思いますので、「何を語ればいいのか」と聞いたら、僕の人生そのもの、どのように炭鉱と関わり生きてきたのか、そして、今日に至るのか、ということをお話していただければいいのではないかというアドバイスをいただきました。ですから、つたない人生でしたけれども、そのようなことを中心にお話しさせていただきます。

父の死、鉄工所に就職

まず、1953（昭和 28）年 1 月、親父がポックリ死んでしまいました。私が中学 3 年生のときです。親父は庶路炭砦で軌道の仕事などをしていました。胃がんで調子が悪かったのですが、ついに 48 歳で亡くなってしまいました。住谷家は多産系で、きょうだいは 9 人でした。姉が 2 人、僕が長男で、下に 6 人です。その幼い子どもたちを残して、

親父はポックリ死んでしまいました。

当時は親父と性格が合わなかったこともあり、「絶対に家を出てやるぞ」という気持ちでいたのですが、中学3年の1月に急に亡くなったものですから、「さあ、これからどうしたらいいのか」と、もう自分の人生真っ暗…。おふくろにも泣かれるし、「困ったなあ」と思いましたが、「この幼いきょうだいを大きくするためには、



白糠町立庶路中学校在学時
1953（昭和28）年

自分が頑張っていかなければならないな」と思い、様々な葛藤がありましたが、親父の友だちから炭鉱の下請をやっていた鉄工所を紹介してもらいました。

今でも忘れないのですが、3月18日が中学校の卒業式で、19日にその鉄工所の樋田寅之助社長のところに面接に行きました。今、私はこのくらいの身長ですが、当時は非常に小さく、160 cmもないくらいでした。面接に行ったら、社長に「使いものになるべか」と第一に言われました。私は、「なんとか頑張りますから、よろしくお願いします」と言いました。社長は「うん、あんたもお父さんに亡くなられて大変だし、まあ、頑張っ

て働け」と言って、面接が終わりました。そして、翌日の20日から働きに行きました。弁当を持って、その鉄工所の一員として働きました。給料は、恥ずかしい話、1日120円。なんぼ働いたって、大勢の家族を養えるような状態ではありませんでした。しかし、そこしか仕事がないですし、炭鉱にはまだ入れませんでした。鉱山保安法という法律があって、満18歳以上でなければ、坑内に入ることはできないということになっていました。ですから、その鉄工所で18歳になるまで頑張っ

て働きました。どんな仕事かというと、炭鉱の坑内で使うアーチ型の鋼枠を主に作っていました。それから、石炭をはしょったりするツルハシやマサカリ、そういったものを作っている会

社の下請けの鉄工所でした。そこで2年間、一生懸命やりました。公休出勤があれば、日曜も休まないで仕事しましたし、残業もしました。

働きながら定時制高校に通う

鉄工所で働き始めるちょうど1年前に、白糠町に夜間課程の定時制高校ができて、鉄工所の先輩にも学校

に通っている人がいました。社長は、「若い者は夜に遊んでいると、ろくなことがないから、お前、定時制高校に通え」というような人でした。しかし、残業があればなるべく残業するようにしていました。社長は、できるだけ時間に配慮してくれましたが、どうしても「明日までに仕上げないといけないから、なんとか2時間残業してくれないか」と言われると、「やります」と言っていました。その理由は2つあって、1つは、残業してお金が欲しかったからです。もう1つの理由は、たいして勉強したくなかったからです。しかし、社長は「よし、残業終わったから次の汽車で学校に行け」と私の尻を叩いて、4時間授業のうち2時間カットして、後半の2時間だけ授業を受けるために次の列車で学校に行きました。

高校での生活は、いろいろな傑作がありました。入学したとき、68人の生徒に対して1クラスしかありませんでした。なぜかといえば、学校といっても、学校ではなかったのです。白糠町は第二次世界大戦まで、軍に送る馬の生産をやっていて、「軍馬補充部」というところがありました。そこに将校さんが来たときに泊まる旅館みたいな建物、クラブみたいな建物を多少増築して、定時制高校の校舎として使っていました。ですから、入学したとき、1つの教室のなかに68人もの生徒が入りました。僕は中学校を出て、現役でそのまま入学しましたが、なかには戦時中ろくに教育を受けなかったのので来た人や、結婚はしていないけれども遥かに年配の人など、全部で68名おりました。し



鉄工所で鋼枠を作る住谷氏（中央）
1955（昭和30）年ころ

かし、卒業するときは 12 名しかいませんでした。ほとんど辞めてしまいました。

こういう話がありました。健康診断があつて、目の検査をやりました。昔の表は、「ABCD」から「イロハニホヘト」、そして、輪がどっちに切れているかと、そういう目の検査をします。今は輪が上下左右のどっちに切れているかという検査ですね。それだけではだめなのです。アルファベットのところを先生が指すと、生徒は首をかしげるのです。これは、見えないのではなくて、読めなかったのです。そういう人もおりました。大笑いしました。でも、そういうことが、現実の問題として定時制高校にあったのです。ですから、英語の試験となれば、「アルファベットを順番に書きなさい」という試験です。僕が卒業した庶路中学校では、英語の分詞構文までやっていました。結構、英語の教育が進んでいました。ですから、定時制高校での英語の試験といったら、全部 100 点です。だから、通知表はオール 5 でした。アルファベットを順番に全部書くなんて、すぐにできます。

それから、数学。三角関数とか、連立方程式とか、そういうものが試験に出ました。すると、年寄りの連中が、僕ら若い人たちに、「おい、ちょっと教えてくれや。おれ、“三角関係”ならわかるけれども、“三角関数”はわからねえ」と、そんな話で大笑いしたことがありました。そういうことで、非常に家族的な定時制高校で学びました。もちろん、スポーツも日が暮れるまでやりました。みっちりバレーの練習をしたり、野球したり。文化祭もやりました。たまたま僕が入学してから 2 年目に、学校で吹奏楽の楽器を用意してくれました。僕は音楽が好きだから、さっそくそれに飛びつきました。これでも、トランペッターで有名でした。「ニニ・ロツソ」という有名なトランペッターまではいきませんでした。トランペッ



トランペットを演奏する住谷氏（右）
1954（昭和 29）年

トの音は大きいので、当時住んでいた炭住では練習できませんから、夜9時の終列車で帰ってから神社の境内に上がって練習しました。僕の2歳下の弟も定時制に通っていて、クラリネットをやっていたので、兄弟で吹奏楽をやっていました。指導者といってもろくな指導者はいませんでした、自分たちで研究しました。あの時代に、譜面の読み方も全部教わりました。B♭（ビー・フラット）だとか、C（ツェー）だとか、E♭（イー・フラット）。音階の違うところとか、あの時代に全部覚えて、なんとか10人ぐらいで吹奏楽部の演奏をしました。時々脱線して合わなくなるけれども、なんとかやりました。当時は、吹奏楽といったら行進曲ばかりでしたから、トラックに乗せられて、行進曲を演奏しながら、街の記念行事に協力した覚えがあります。新潟や富山などから庶路に来た人たちの集落では、故郷の祭りの日に合わせてこちらでも祭りをやっていたので、そのたびに呼ばれて演奏しました。非常に楽しい、定時制高校時代でした。

炭鉱に転職

そして、高校3年生になって、18歳になりました。すると、「炭鉱に採用したいので健康診断を受けてくれ」ということになり、健康診断を受けました。確か、1957（昭和32）年の6月だと思います。もちろん、健康そのものでしたから、すぐに合格しました。

鉄工所の樋田社長には、採用が決まってから辞めるという話をしようと思っていたので、採用の通知が来てから、社長のところに行きました。「実は辞めさせていただきたい」と話すと、「そんな話だったら、おれも話があるから、ちょっと家へ来い」ということになりました。社長は、「お前はこそこそ知らない顔して、健康診断なんか受けていたが、おれは全部知っていた。なぜ『炭鉱に入るの、辞めることになるかもわからない』ということを事前におれに言わなかった」と非常に怒られました。「2年かけて、ひとり現場を任せても技術的に完璧に仕事できるようになったのに、ここでその技術を全部捨てて、あの危険な坑内に入って行くのか。お前、何人もケガしたり、死んでいった人間を見ているだろ。そういう危険なところになぜ行くんだ」と言われました。

私は、はっきり言いました。「実は申し訳ないけれども、今の給料では家族を養って

いくことはできません。炭鉱会社に採用されれば、住宅は当たるし、燃料・電気・水道などはほとんどタダに近い値段になったり、厚生面の優遇があります。今の家族を養っていくという点では、はっきり言って、ここの給料では食べさせていけないので、炭鉱に行くことにしました」と。

すると、その社長曰く、「ここで身に付けた技術をさらに磨くために、日立製作所とか、そういう大きなところに行くというのであれば、おれは喜んで送り出す。2年間、お前にガス溶接や電気溶接とか、一生懸命いろいろなことを教えて、1人でなんでもできるようになったのを全部辞めて、炭鉱のなかに入るなんて、おれは見るに忍びない。それから、ケガ人の状態を見たり、殉職していった人間を見たりすると、非常に見るに忍びない、情けない」と、しまいには社長に泣かれてしまったのです。「残念だ」と。

僕もどうしていいかわからなくて、より一層、金のことにこだわって、「家族がこれだけ多かったら、食べさせていくには大変だから、社長、なんとか認めていただきたい」と言いました。社長も最後は理解してくれて、茶筴筥から、なんというか忘れましたが、特殊な日本酒を出して、まるで親分・子分の別れの杯を社長と交わして、「怪我しないように、元気で頑張ってやれよ」と激励されて、鉄工所を辞めました。



鉄工所の仲間たちと住谷氏（一番左）
1955（昭和30）年ころ

2. 炭鉱マン時代

(1) 炭鉱での仕事と高校生活の両立

入社当初—通気夫としての仕事—

会社採用されてまもなく、面接がありました。当時、採炭課や機電課など、いろいろな課がありましたが、採用になるのは、やっぱり坑内ですから、採炭課長の面接を受けました。そこには労働課長もいて、「君は定時制高校に通っているが、ご承知のとおり、炭鉱では一番方、二番方、三番方の三交代でやっている。ひょっとしたら二番方もやらなければならない場合、時間がぶつかって学校に行けなくなるかもしれない。そのときはどうする。最悪の場合、学校を辞めなければならないかも知れない」と言われました。私は、「なんとか定時制高校だけは卒業したいと自分では思っておりますので、できれば二番方を免除してもらいたい」と言いました。すると、「うん、気持ちはいわかるけれども、これだけの従業員を抱えているところで、同じ職場の人間が理解してくれればいいけれども、理解されなかったら、ひょっとしたら学校を辞めなければいけないかもよ。そのときはどうする」と言われました。私は、「最悪の場合には、やむをえません。通信教育でもなんでも切り替えて、なんとしても高校の卒業資格だけは取りたいです」と言いました。当時の課長に、「いまどきの若者では大した者だ」と褒められました。

そして、最初は「通気夫」に配属されました。通気夫は常一番（ジョウイチバン）で、三交替ではなく、一番方だけでした。「これはよかった。学校辞めなくて済んだ」と思いました。そこに半年おりました。

初めてあの暗いところにキャップランプをつけて、リュックを背負って入って行きました。いや、おっかない。天盤からパラパラと小さな石が落ちただけで、「ハッ」というふうになって、ほんとにビクビクしていました。すると、先輩たちが「なににもそんなにおっかながることねえ。そのうち慣れるから、大丈夫だ」と言って、力づけてくれましたが、自分にとっては、やっぱり「こりゃ、危険だな」と思いました。

事故が起きたときは、特に「絶対に坑内に入りたくないな」と思いました。当時は救

急車もなにもなかったですから、事故でケガしたり、崩落によって埋まった人間を助け出して病院まで運ぶときは、全部担架でした。そうすると、ケガした人が痛くて、唸って、それがハーモニカ長屋みたいな炭住街の横を通って行くものですから、「絶対に入りたくない」と思っていました。

しかし、家庭的な問題でやむをえず、「よしっ、このきょうだいたちを大きくするために、一人前にするためには、おれひとりが犠牲になりゃいいんだ」と。それからガス爆発だとか、いろんな炭鉱事故があちこちでありましたけれども、「そのときはそのとき」と、覚悟を決めて、「死んだら死んだで、しょうがねえや」と思いながら、炭鉱に入ることを決心しました。そういう経過もあったものですから、いざ入ってみたら、「パラパラッ」と小石が落ちるだけでもビクビクしながら半年間やりました。

運搬夫へ異動—二番方を免除してもらう—

斜坑を上がった坑口の傍らに、通気夫が飯を食べる休憩所がありました。そして、炭車が行ったり来たりする線路を挟んだところに、それを操作する「運搬夫」、別名「棹取り（サオトリ）」たちがいる休憩室がありました。そこにいたある人が、「お前、棹取りにならねえか。ちょうど人数足りなくて、増やしてもらうように頼んでいるんだが、会社はさっぱり考えねえんだ。若いやつ探しているんだが、お前どうだ」と言われました。そこには結構年代も同じぐらいの若い人たちもいました。

なぜ若い者でないと勤まらないかというと、800mの斜坑をずっと炭車に乗って下がるのですが、約2分で行ってしまうほど速いのです。それに飛び乗ったり、飛び降りたりしなければならないものですから、年寄りではちょっと無理な仕事なのです。ですから、通気夫をやっているときよりも、賃金が高いのです。だから、覚悟を決めて、定時制高校3年生（18歳）のときにそっちへ移りました。

ところが、棹取りは三交代制で、二番方がありました。定時制に行けなくなってしまったので、職場の人たちみんなに「何とかひとつ、学校だけは卒業したいから、二番方だけ免除してくれないか」とお願いしました。すると、当時その職場に30人いて、総会

を開いて、「本人からこういう申し出があるけれども、おれたちも勉強したくても高等学校も行けなかったし、せいぜい昔の小学校高等科を卒業したくらいで勉強できなかったから、住谷がそういう気持ちでいるんだから、みんなで助けてやったらどうだろう」ということになりました。みんな理解してくれて、二番方を免除してくれたのです。それで定時制高校に続けて行けるようになりました。

学校は夜の9時に終わって、白糠駅を9時何分かに出発する汽車に乗って西庶路駅で降りて、そして、家まで歩いて帰って、現場着に着替えて、飯を食って、三番方に出勤します。そして、勤務時間が朝の7時までで、7時になったら一番方の人に来るから交替して、風呂に入って、家に帰って寝ます。そして、汽車が夕方5時なんぼだったので、その時間まで寝て、晩飯を早めに食べて、学校へ行きます。それで、帰って来てまた三番方に行く。そういう生活を定時制高校を卒業するまでの約1年ちょっと続けました。

いやあ、眠くて、眠くて、授業を受けていると居眠りしてしまいます。すると先生が、「住谷、疲れてるのか？」と聞いて、「はい、疲れてます」と答えると、「よし、かまわないから寝ろ。寝ていいから。話聞かなくていい。眠たかったら寝てろ」と言われました。そう言われると寝れないものです。ですから、できるだけ我慢して授業を受けました。

「働こう学ぼう運動」

そして、高校3年生になってすぐに先輩から命令されて生徒会長になってしまい、さらに忙しくなりました。4時間という限られた時間のなかで、授業を受けて、生徒会の仕事もしました。一人前に学校祭や体育祭もやりました。

なかでも力を入れたのが、のちに「働こう学ぼう運動」として有名になる定時制教育振興に関する運動です。これはすべての町民に何らかの方法で高校レベルの学力を身につけさせようとする運動で、町民に対してさまざまにアピールしました。街で吹奏楽の演奏をしたり、白糠駅前で古い枕木に火を点けてファイヤー・ストームをやったりもし

ました。当時の駅前舗装されておらず、砂利だったので、火を焚くことが許可されました。定時制の学校祭も街のなかにしっかり定着して、有名になっていました。町民もかなり協力してくれました。

「働こう学ぼう運動」のなかで特筆すべきは、学校が各事業所をまわって、入学してくる生徒の就職を斡旋したことです。これは北海道新聞にも掲載されました。この「働こう学ぼう運動」は、定時制課程が閉課となる 1981（昭和 56）年まで行われ、給食室をつくったり、運動場にナイターの施設を設けるなどの事業も行いました。

全日制高校設立にむけた作業

卒業する 1 年前に、町立の全日制高校を作ろうという運動が始まりました。そして、町が管理している山林を伐採して、木材として売って、その金で一斉に 2 階建ての新しい校舎を建てました。将来的には道立に移管するという目的で建てました。そこで、僕らも 1 年ちょっと勉強することができました。前の校舎では、冬になって吹雪になれば、どこからか雪がファーッと入ってくるような教室でした。授業のベルは先生がガーンと押して授業に来る、そういう学校でした。新しい校舎は 2 階建てで、4 教室ぐらいしかなかったですが、そこに 1 年ぐらい入ることができました。



1954（昭和 29）年に完成した新校舎

しかし、校舎を建てるために、まず学校へ行ったら、校舎を建てる場所の石ころを全部取る作業をやらされました。一輪車に土砂を積んで、石ころを積んで、別のところへ運んで行く作業を目いっぱいやらされました。生徒たち

からかなり文句が出ました。「なんでおれた

ちがこんなことしなきゃならねえんだ」と。たまたま僕も生徒会長をやっていましたから、自ら文句を言うわけにはいきませんでした。「まあ、そう言うなって。新しい校舎

を建ててくれると言ってるのだから、これくらいのこと」と。日が暮れるまで1時間かそこら授業をカットして、そういう作業をやらされても、「文句言うな」とみんなを引っ張って、作業しました。

生徒会長としての活躍

そして、2階建ての校舎が建ち、全日制の生徒の募集が始まったわけです。そうすると、いうことのきかない、生意気な全日制の生徒が来るのです。町立の学校ですから、いろいろな生徒がいて、中には先生を困らせたり、せっかく建てた学校のガラスを割ってみたりと、どうにもならない悪をする連中が何人かいたのです。そしたら、担任に「住谷、ちょっと話あるから来い」と言われ、「おれ、なにしたかなあ」と思っていたら、「どうも全日制の生徒で悪いのが何人かいるから、あれ、なんとかするべ」と先生が言うのです。「よし、わかった」と、誰それと呼びだして、「お前、こういうことしていいのか」と言うと、なかには抵抗するやつがいました。ところが、こっちは鉄工所に勤務して、毎日、重いものをいじったり、持ったり、担いだりして、筋肉は隆々としているし、炭鉱に入っても、やっぱり力があるものですから、見事にそいつらを征伐してしまいました。そいつらは大人しくなって、一生懸命やるようになりました。ダメなやつは退学していきました。

先生じゃなくて生徒が全部征伐したから、先生方は楽だったと思います。先生方に頼まれてそういうことをやりました。今では考えられないことですが、当時はそれが通用したのです。

今度は校長にも頼まれました。見てみると、悪いことするやつのなかに、校長の息子も入っていました。親父である校長から、「どうも自分の子どもながら、おれの力ではなんともしがたい。住谷、なんとか頼む。うちの息子をうまく更生させてくれねえか」と頼まれました。

「いやあ、校長先生のお墨付きがあったら、なにしたらいいだろう」と思って、いきなりぶん殴りました。そしたらその息子は泣いちゃいました。「お前、なんでそうい

うぐれたことばかりやってるんだ」と言うと、「いや、みんなが『お前は校長の息子だから、なにしても怒られないべ』って言うけど、そういうことに、僕は不満を感じているんだ」と言うのです。「お前、そんなこと、理由にならねえべや。今からそんなことやってたら、お前の将来はないぞ」と生意気な教師みたいなことを言いました。鮮明に覚えています。

その後、その息子は立ち直って、非常にいい方向に向かい、しまいには大学の教授になりました。だから、何年かに一遍会えば、彼は「あなたにやられたことは一生忘れません」と、そんなことを言っています。「また叩いてやるべかな」と思いましたが、まあ、そういう立派な人になりました。



高校の仲間たちと（右から3番目が住谷氏）

1955（昭和30）年

同期の転職

そんなことで、運搬夫になって、若いみんなとわんわんやりながら、棹取りをやりました。見ている前で、事故で死んでいった人間もあります。幸いにして、僕は7年7ヶ月、炭鉱にお世話になりましたけれども、1回も怪我しませんでした。

僕と同じく定時制に通いながら鉄工所で勤務していた友人も、同時に炭鉱に採用されて、運搬夫になったのですが、ちょいちょい怪我していました。おふくろさんも「どうしてうちの子だけ、こうやって怪我ばかりするんだろうか」と心配していました。

あるとき、そいつが「おい、ちょっと相談がある」と言ってきて、「なした」と聞いたら、「おれ、ケガばかりしていて、このまま炭鉱にいて、もし死んだら終わりだから辞める。実は、釧路刑務所の刑務官の試験を受けに行ってきた。そしたら、受かった。お前と別れるのは淋しいけれども、おれ、炭鉱には合わねえから」と言って、

炭鉱を辞めて釧路の刑務官になりました。「そうか。いやいや、それはよかった。お互いにがんばってやろうよ」と一杯飲んで別れました。これからは燃料を全部自分で買わなければならないから、「お前にやれることはこれしかない」と石炭を2トンほど、引越しのときにくれてやりました。そしたら、喜んでいました。

(2) 労働組合での活躍

立坑建設による配置転換—職場幹事の仕事—

そんなことで、一応、運搬夫を何年かやっていたら、今度は1956（昭和31）年から、立坑の建設が始まりました。それで、1961（昭和36）年に完成して、運搬夫が30人もいなくなりました。合理化して、斜坑から石炭を出して運ぶことをやめて、全部立坑から石炭を搬出するようにしたのです。立坑から入坑したり、坑外に上がってきたり、働く人たちも全部エレベーターみたいなもので行ったり来たりしました。その時、会社の幹部は、「庶路100年の大計だ。これでこの炭鉱の存続は、100年は間違いない」というふうに豪語したのです。3年くらいで閉山してしまいましたが。

そういうことで、立坑ができて、運搬夫が半分の15人になりました。そうすると、15人を配置転換しなければなりません。それで、僕は自ら運搬夫をやめて、掘進夫になりました（23歳ころ）。これは請負で、すごく金取りがいいのです。それから、その時はすでに高等学校を卒業しておりましたので、一番、二番、三番という仕事でずっと勤務できました。



職場単位の労働組合幹事を務めていたころ
（一番右が住谷氏）1960（昭和35）年

ただ、自ら掘進夫になったのにはもう一つ理由があります。実は当時、労働組合の幹事というものが各職場にいたのですが、運搬夫をやっていた時に、「お前、幹事やれ」とみんなに言われて、運搬夫の代表幹事

として、労働組合の仕事に関わっていたのです（19歳から）。もちろん、民主青年同盟とか、社会主義青年同盟とか、いろいろな組織がありましたが、そういうものには一切入らず、庶路炭砦の青年部の部長をやっていました。そんな関係があったものですから、「お前、幹事やれ」ということで、幹事をやっていました。組合の幹事会というと、組合出勤なのです。仕事を休んで幹事会に行って、執行部が提案することについていろいろと協議して、「それは賛成」とか「反対」とか、議決する機関があったのです。

そういうことをやっていたものですから、どうやって配置転換するかということを率先して考えていました。なかには、「他の職場に行きたくない」、「おれはここでいい」という人もいます。だけど、どうしても半分の人がいらなくなってしまうものですから、主な人に説得して、「どうだ、行かないか」と誘って、ようやく他の職場にそれぞれ配転しました。そして、僕も掘進夫になったのです。

「強い労働組合」の執行部を務める

掘進の仕事はずっとやっているうちに、「組合の執行部をやれ」ということになりました（25歳）。常駐の幹部です。「さて、困ったな」と思いました。そういう仕事をやると、必ず「赤系統だ」とレッテルを貼られます。

うちの炭砦は労働組合がすごく強かったのです。労使関係があまりスムーズにいったなかったのです。それで明治鉱業本社は、「庶路のヤマには、下手な人間を送り込んで、絶対ダメだ」と、本社の重役クラスの間を庶路炭砦の所長として送り込んできました。組合にとっては、「相手にとって不足はない」ということで、ますます団体交渉でもなんでも、厳しく所長を攻撃するようになりました。

僕が執行委員になる前の話ですけれども、団体交渉の席上で問題が決裂して、会社の幹部と組合の幹部が別々の部屋に行き、それぞれ作戦を練っていました。ところが、その重役の所長が「一人にしてくれ」と言って、人払いして、自殺を図ってしまいました。命は助かりましたが、そういう事件があるくらい、非常に強い労働組合でした。

坑内火災への対処

組合の保安部長として坑内火災へも対処しました。1962（昭和 37）年 9 月ころ、釧路に用があつて庶路を離れていたときに、「坑内で火災が発生した」という電話が入りました。以前から温度の高いポイントだったので、保安部長として会社に注意するように指示していたのですが、火災に至ってしまいました。すぐにタクシーで戻り、自宅に着いたのは 23 時を過ぎていました。坑口に向かう前に、妻と別れの盃をかわしました。

「ガス爆発や炭塵爆発につながれば命はないから、その時はお前が家族のことを守ってくれよ」と言って家を出ました。

二番方を帰さずに作業に取り掛かろうとしましたが、従業員はみんなパンツァーという石炭を運ぶ機械の上に腰かけて、「おい、早く結論出せよ。おれはまだ死にたくないからな。逃げるなら逃げる。どうするんだ」と帰ろうとする人もいました。「いや、今課長と打ち合わせしてきてすぐ連絡するから、もうちょっと休んでいてくれ」と言うと、「早くせいよ」と言われました。課長に「どうする」と聞くと、「密閉しよう」ということになりました。鎮火のために空気を送らないようにする必要があり、土のうを積み上げてセメントを注入することになったのです。

しかし、ガスに引火したりして「ドン」と来たら終わりですから、「おれは帰る」という人もいれば、「いや、緊急事態だからおれはやる」という人もいました。そこで、課長と交渉して一方あたり 1000 円か 1500 円の手当を付けることにしました。会社は仕事してもらわなければならないから特別手当をつけたのです。従業員に「こういうわけだから、みんな協力してくれないか」と言うと、ほとんどが「わかった。お前がそう言うのであれば仕方ない。やろうじゃないか」ということで作業に取りかかりました。ガスを吸ったときには、みかんとか柑橘類がすごくいいということなので、みかんの時期ではなかったけれども、柑橘類をたくさん入れて、現場で食べた記憶があります。

作業は 3 日間にわたり、ようやく密閉することができました。幸い、火災はガスや炭塵に引火せず、無事に消火できました。

石炭政策転換闘争に参加

石炭政策転換闘争にも参加しました。国の政策によって、石炭をやめて石油に頼る時代になって、炭鉱労働者 10 万人が組織を組んで、日比谷の野外音楽堂に集結したことがあります（1962 年、24 歳）。委員長に呼ばれて、「お前、若いんだから行ってこい」と言われて、キャップランプをつけたまま、炭鉱夫のスタイルで、函館から連絡船に乗って、青森に渡って、裏日本を東京まで歩きました。各地区の人たちに現状を訴えながら、ずっと歩きました。山越えもして、大変なところはバスを使いましたが、それ以外はほとんど歩きました。足の裏にマメができて、それを地元の病院の看護婦さんが来て、破って、昔は赤チンキというのがあって、それをなかに突っ込むのです。いやあ、痛いの、痛くねえのって。そのような状態でも、次の日もまた歩かなければなりませんでした。

そんなことで、九州や常磐、北海道から炭鉱労働者が来て、10 万人集会をやって、氣勢をあげました。それから、新橋、土橋へとデモ行進をやりました。すると、右翼が街宣車に乗って、バァーッと来たのです。そしたらこっちも炭鉱労働者ですから、「やるならやるか」というもので構えました。機動隊が真ん中にダーッと入って事なきを得ましたが、本当にやっていたら大変なことでした。こちらは 10 万人もいたのですから。



石炭政策転換闘争デモ、国会議事堂を背景に
（最前列右が住谷氏）1962（昭和 37）年

（3）庶路炭砒の閉山

関連企業への就職を断る

そのようなことをやりましたが、結局は三井三池のあの大きな事故が天王山で、あれ以来、炭鉱がだんだんと寂れて、なくなっていきました。そして、庶路炭砒はついに、1964（昭和 39）年 1 月 31 日に閉山せざるを得なくなりました（26 歳）。

閉山の条件としては、「新しい企業を興して、そこに従業員を収容すること」、これが閉山に同意する条件でした。そして、5つの新しい企業を作ったのです。そこへ、今まで働いていた従業員をそれぞれ振り分けて採用してもらって、閉山協定を結んだということです。

われわれ執行部はどうするかというと、当時、執行部は委員長や私も含めて5人いたのですが、それぞれの新しい企業の管理職の課長やなにかのポストをあてがわれて、みんながそこに行くようになりました。私もその一人で、新しく作った企業の総務課長を与えられました。でも、私は全然行くつもりはありませんでした。なぜなら、今まで同志として働いていた人たちを、今度は使う立場になって、文句の一つも言わなければならないし、厳しいことも言わなければならないでしょ。おれはそういうのが嫌でした。全く知らない人間を使うのであれば、話は別でしたが、「同志を使うところにおれは行く気はない」と委員長に言いました。「そしたら、どうするんだ」と聞かれて、「どうするって、おれはまだ若いから、どうにでもなる」と言いました。

もうその頃にはきょうだいたちも全員巣立っていましたし、そんなに僕の負担になることもありませんでした。おふくろだけがいましたが、なんとか生活できるし、「自分でなんとでもするぞ」という気持ちを持って、「関連会社に就職するつもりはない」と言って断りました。

早稲田出身の労働課長

そういった会社との交渉は、炭鉱の立派な倶楽部でやっていました。管理人がいるので泊まることができたり、調理人もいるので、料理を作って中で食事ができたりするところです。そこで、会社との交渉をやって、まず委員長から2階の部屋に上って行って、「あんたは、ここのポスト」とあてがわれ、次に書記長が呼ばれ、次は給与対策部長、次、労働部長、そして最後に、保安部長だった僕が呼ばれました。

すると、早稲田に縁があるのかな、労働課長は早稲田大学を出た生意気な野郎だったのです。みなさんの大先輩です。それがヘビみたいな目つきをしているのです。そこに

行くなり、「委員長から話は聞いてるだろ！」といきなりこう言うのです。僕は、「組織を解散したと思って、態度をガラッと変えやがって。とんでもない野郎だな」と、頭にカチンときました。その労働課長は、開口一番、「お前、会社の課長である私にあれしたんだ。会社にとっては、極めてありがたい存在だった。だが、委員長との約束があるから、こうしてポストを用意したんだ」と言われました。僕のことから、「誰がお前に仕事の世話してくれって頼んだか」と、こうなったのです。柔道初段とかなんとかって言うていましたが、「ただじゃおかねえぞ」と思いました。

この労働課長とは、それまでもいろいろなことがありました。課長が言った「あれ」とは、つぎのようなことでした。

炭鉱があったとき、畳一枚くらいの炭壁がガバッと倒れて、その下敷きになって大ケガした人がいました。それで、僕が保安担当だったから（25歳）、すぐに連絡がきて、坑口まで走ったのですが、尿道切断、大腿骨骨折、恥骨骨折と重傷でした。そして、その人を病院まで送って、手術台の上まで乗付けてやったら、「殺してくれ」と叫んで、血圧も50くらいまで下がってしまったのです。すると、外科の先生は、「おい、これもうダメだわ」と簡単に言うんですよ。「尿道切断って、おれ、専門でねえもの。おれ、外科だもの。尿道だったら、泌尿器科の医者でなかったらわからないもの」と。

そこで、釧路市立病院に北海道でも有名な泌尿器科の先生がいたので、僕が事務長に「その先生を呼べ」と指示しました。炭鉱の病院に救急車があったので、救急車で市立病院まで迎えに行ったのです。僕はケガした人の手を握って「頑張れよ」と、手術場で激励していました。

すると、うちの仲間が来て、「おいおい、なんか、事務長が労働課長にえらい気合かかっているぞ」と言うので、「なして」と聞くと、「いや、なんかわからないけれども、怒鳴ってるぞ」と言うのです。その仲間に激励を代ってもらって、事務長のところに行くと、労働課長が「誰の許可を得て医者を頼んだんだ。そんな医者を頼めるほど、お前に権限を与えてないぞ」と、事務長に焼を入れていたのです。それで僕は、「なに、この野郎、お前もう一回言うてみろ。今、人間が一人、生きるか死ぬかというときに、なに

金のことばかりこだわって」と掴みかかってやりました。その「早稲田大学」を、みんなには悪いけれども、病院でどつきました。25、6 のときだもの、元気いいさ。「ほう」って、どついちゃいました。

そのうちに救急車が来て、すぐ手術に入りました。その泌尿器科の医者には本当に助けられました。もう、元気のいい先生で、来たときに、「苦しいか？苦しいべ？おれが今、楽にしてやるからな。頑張れよ」と、手を洗いながらも、そうやって言って手術に入りました。人手不足なものですから、僕が手術場でライト持ちをしました。蒸気でムンムンいっているところで、医者は顔を出せば看護婦が汗を拭いてくれるけれども、こっちはだれも拭いてくれませんでした。ライトを持って、人間の中を初めて見ましたが、恥骨もカタカタというくらい折れて、大腿骨も折れていました。だけど、医者は「大腿骨の手術は後回しだ。多少、足を引く歩き方になるけれども、かまっていられない。とにかく尿道をつなぐことだ」と判断しました。小便が体のなかで出て漏れたら、尿毒症を起こして、人間は死んでしまうということでした。

それで、結果的にその人は助かったのですが、労働課長とのそういう一戦があって、病院のなかでわれるような声を出して怒鳴りました。それで、あとで落ち着いてから、団体交渉しました。そしたら、書記長が「おい、保安部長が主役なんだからな。徹底してやれ」と言うので、労働課長を吊るしあげて、こっちは叩いたことなんか謝らずに、「お前、あんなもんで済んでないぞ。まだまだやる気だったんだぞ。冗談でねえぞ、お前、今度あんな態度取ったら、ただじゃおかないぞ」と。団体交渉で会社の幹部が全部並んで、もう抗議のストライキをやるというところまでいきました。経営者としてはこれが一番嫌がるのです。ストライキはできませんでしたが、労働課長は「申し訳なかった」とテーブルに手をついていました。

そんなことがあったものですから、閉山となったときに威張っちゃって、「会社にとってありがたくない存在だ」と言われました。「そのとおりだ」と認めながらも、「なにクソッ、お前みたいなのに頼まねえ」と思って、面接のときにドアを蹴っ飛ばして帰ってきました。

そして、みんなそれぞれの新しい企業に就職して、おれ一人になりました。そのときは、役所に入る話はまだありませんでした。

3. 行政マン時代

町役場に再就職

その後、失業保険、今で言えば雇用保険を貰いながら、組合事務所に毎日出勤して、閉山後の残務処理をしていました。そしたら、そこに町長が来ました。これがまた中学校のときの校長先生で、僕らが卒業すると同時に、白糠町の教育長になって、1963（昭和 38）年の町長選挙に立候補して、対立候補に 38 票差で勝って町長になりました。僕も、もちろん選挙カーに乗りました。マイクを持って、白糠の町を隅々まで歩きました。

そのような関係があったかないかは別にしても、町長が「あんた、おれがちゃんと面倒みるから、役場に入りなさい」と言ってくれました。おふくろにも「町長さんが、せっかくそうやって言ってくれるんだから」と言われましたが、おれ、役場の雰囲気好きでないから、「行かねえ」と言ったのです。「あんな、なんか暗くて、なに考えているのかわからない連中ばかり集まっているところに行きたくない」と。そしたらおふくろに「そう言わないで」と泣かれてしまって、しぶしぶ、町長さんの言うとおりに、役場に採用になりました。1964（昭和 39）年 7 月 1 日付で採用になりました（26 歳）。それから、文句言いながら 35 年勤めました。

教育委員会に配属

最初に教育委員会に配属になりました。教育委員会の偉い人の傍に半年間置かれて、地方公務員法、自治法、白糠町の条例と、こんなに厚い本を預けられて、「これ見て、勉強してください」と言われました。「自治法だか、^じ^じば法だか知らねえけれども、こんなことやるなら入るんでなかったな」と思ったものです。当時、教育委員は 5 人いて、5 人で委員長を決めます。互選するのです。それが、これまた早稲田大学を出て、東京で新聞記者をやっていた人が教育委員長をやっていました。

社会教育主事資格の取得—北海道大学での講習会—

僕が役所に入った 1964(昭和 39) 年、その人は教育委員長を務めて 2 年目でしたが、「ちょっと話あるから、うちに来なさい」ということになって行きました。「なんでしようか」と言ったら、「あなた、勉強する気ないか」と、いきなり言われ、「え、なんの勉強ですか」と聞いたら、「社会教育主事の資格を取ったらどうだ」と言うのです。それには講習を受けなければならないのです。社会教育法で、「人口 1 万以上の町村では、必ず社会教育主事を置きなさい」ということになっていました。当時、7、8 月の夏休みになったときに、北海道大学で主事講習を 60 日かけてやっていました。教育委員長は、「そこに行って来い」と言うのです。「え、いまさら…」と思いましたが、せっかくそうやって心配してくれているのだから、「わかりました。では、お言葉に甘えて」ということで行きました。あの頃は文部省の認定でしたが、今は北海道教育委員会の認定です。しかも、講習期間は、僕らのときは 2 ヶ月あったのに、今では 1 ヶ月になりました。

さあ、社会教育原論、哲学、心理学と、なにがなんだかさっぱりわからないことをドーンと教えられました。受講生は学校の教員から行政職員など、ざっとまとめて、65 人くらいいました。第一日目の講義で文部省の社会教育局長が来ていました。役人のお偉いさんが来ているので、教授連中もブラザー並んでいました。教育学部の学部長をはじめ、北大の学長もいたという話です。

そしたら、その局長が一番前に座っている人に「君、教員か？それとも行政職員か？」と聞き、「教員です」と答えると、「教員か。では、学校教育法の定義を言え」と言いました。その一番前の人は、どこかの校長先生だったのですが、しどろもどろしながら答えると、「ふうん、そんなのでよく教員が務まるなあ」と言われました。

今度は「社会教育法の定義を言え」ということになって、「誰か行政職員はいないか？」となったので、僕が手を挙げました。そしたら、指名されたので、定義はこうだと言いました。要するに、だいぶ忘れましたが、学校教育に関わっている人間以外を対象

に、その専門的立場から指導・助言する、それが社会教育主事の仕事であって、そういう教育の機会を与えなければならない、というようなことを言いました。すると、「うん、さすが行政職員だな」と言われました。

その後、約1時間、その人が喋りました。バリバリの官僚でした。いきなり、「それでよく教員が務まるな」と言われたものですから、みんなだいぶ憤慨していました。講義が終わって、その局長が帰るとなったら、教授連中たちみんなゾロゾロと後をついて行って、玄関まで送りに出て、「ありがとうございました」と頭を下げていました。

そんなことで、2ヶ月間、釧路とぜんぜん気候が違うものすごく暑い札幌で下宿して、勉強しました。最終的には論文を書かなければならないわけです。しかし、「グループワークの発表者になれば、卒論は免除されるみたいだ」という噂が出たものですから、「どうせ苦勞するくらいならここで苦勞したほうがいい」と思って、手を挙げて、発表者になりました。そして、教授たちが助言者として座っているところで、「白糠の青少年教育をどうしたらいいか」というテーマで15分間の提言をしました。グループワークのなかでみんなでいろいろ話して、教授の助言をもらったりしてやりました。

しかし、噂は真っ赤なうそでした。卒論は卒論でちゃんと書かなければなりませんでした。北海道大学専用の原稿用紙があって、1枚が1,000字で、最低10枚以上でした。

「定時制高校しか出ていないこの頭で、どうしたらいいべ」と思いました。教授に聞いてもみんな「図書館に私の書いた本がありますから読んでください」の一辺倒でした。仕方ないから北大の図書館に行って、教授の書いたやつを見て、論文に取り入れて書きました。

もうわからなくて、わからなくて、4、5キロ痩せて帰ってきました。まあ、それでも公務として旅費もなにもかも役所が出してくれたので行ってきました。そして、無事に帰ってきました。その論文も、遅れてもいいというので、札幌にいたときに半分くらい書いて、家に帰ってから残りを書いて仕上げて送りました。すると、文部大臣から立派な認定書が送られてきました。そしたら、給料が3号上がりました。1万円くらい。

「やっぱり資格を取ると給料上がるんだな。やっぱり行って、苦勞してよかったな」と

思いました。

元炭鉱マンから見た行政マン

仕事は一生懸命やりました。家に帰るのは8時、9時でした。余談ですが、役所に入ったときから、「役所の連中は仕事を一生懸命しない人が多いな」と思いました。

たとえば、ルンペンストーブの清掃です。当時の暖房は石炭だけで、ルンペンストーブでみんな暖を取っていました。ルンペンストーブの円筒は、煤で詰まってしまうので、1週間に1回、煙突の掃除をしなければなりません。それも全部自分1人でやらなければなりませんでした。脚立を上がって、煙突を外して掃除します。そんなものは、炭鉱や鉄工所で苦勞してきているからどうってことはなかったのですが、「今日、煙突を掃除するから」と言ったら、課長からみんな逃げて、誰もいなくなっていました。それで、女性職員を相手に、「おい、ちょっとこれを持ってくれないか」とかなんとか頼んで、掃除しました。それで、掃除が終わった頃にみんながモソモソと戻ってきました。民間にいて苦勞してきた人間から見ると、「働かない連中だな」と思っていました。

まあ、そんなふうに思っていたんですが、教育委員会本部にいたときに比べれば、社会教育係のときのほうがずっと働きやすかったです。青年団体とか婦人団体とか社会教育関係団体などいろいろな団体があり、アイヌ文化の団体も全部含まれていました。社会教育係は課長、係長を除いて僕1人ですから、ほとんど自分でやらなければならない状態でした。

道民の船、釧路分団長を務める

社会教育課にいたときには、青年や婦人の道外研修を担当しました。阿寒町や釧路町など近隣市町村と合同で青年・婦人ら約30名を引率しました。東京までフェリーで30時間かけて行き、静岡県御殿場の青年の家に宿泊して、トヨタの工場を見学したりしました。ちょうど高度経済成長期で、トヨタの歓待ぶりには驚きました。大型バスで送迎してくれたり、記念品をくれたりしました。

一番の思い出は、1973（昭和 48）年の「道民の船」という北海道の事業です（35 歳）。北海道の青少年を東南アジアに派遣して、海外で見聞を広めてくるという事業でした。小樽の港から船で出て、韓国の釜山、香港、タイのバンコク、シンガポール、最後はフィリピンのマニラと、5ヶ国を青年たちがグルッと回ってくるというものです。全部で 480 人の青年たちが 1 万トン級の船に乗りました。道内に 14 支庁ありましたから、14 の分団があり、14 人の分団長がおりました。そのうちの釧路分団の分団長に僕がなりました。釧路管内 20 人の青年を引率しました。

当時は種痘やコレラの予防注射もしなければなりませんでした。そして、パスポートを取って、この 5ヶ国を回りました。小樽の港から出るときは「船旅もいいものだな」と思い、すぐ昼飯になって、「いや、こんなにうまいものを食わせてくれるのか」と喜んでいましたが、そのうちに荒れて、



道民の船、釧路分団長を務める住谷氏（右）
1973（昭和 48）年

荒れて、荒れて大変だったけれども、なんとか釜山に着きました。昭和 20 年代前半の鄙びた日本と似たようなところで、「なんじゃこれ」と思うくらいの低開発国でした。香港に行ったら、「お金を出した分だけ教育を受けられる」、つまり、「お金を出さなければ教育は受けられない」という教育事情を知りました。タイに行くと、こんな変な手作りしたものを、「1000 円、1000 円！」と全部 1000 円で買えと群がってくるのです。一番よかったのは、シンガポールです。イギリスの植民地だけあって、治安もしっかりしていて、ものすごく街もきれいでした。シンガポールにはもう 1 回行きたいです。

そして、最後は、フィリピンのマニラでした。これは、第二次世界大戦の時に、日本

の軍隊がかなり悪いことをしたらしいですね。現地の人間を何千人と牢に入れて、水牢にして、マニラ湾の水門を開けたらしいです。だから、オリエンテーションで「非常に対日感情が悪いから、喧嘩を売られて買ったら殺されるかもわからない」という話をしました。僕は 20 人の青年たちを無事に日本に連れて帰ってこなければならぬという責任がありますから、それはもう大変でした。それから、「生ものは一切食うなよ。食べたらダメだよ。水もダメ」ということでした。しかし、「注射してきたから、多少はいいよね」と食べたあのバナナのおいしかったこと、パイナップルのあの甘さ。日本で食べるものとは全然違いました。

このように、社会教育主事をやっていた 1973（昭和 48）年に、釧路分団の責任者を務めました。いまだに、その集いを札幌で冬にやっています。もう 40 年以上になりますが、まだやっています。年々、誰が死んだ、彼が死んだと少なくなっていくますけれども、いまだに出航した日を記念してやっています。

社会課へ異動

そうこうしているうちに、ときの町長が「お前、社会教育ばかり 10 年もやっているが、役所の職員で生きていくのであれば、もう少し別な仕事も覚えたほうがいい。だから、社会教育はもういいべ。代われ」ということで、人事異動で本庁に行って、商工課の係長を何年かやり（36～41 歳ころ）、それから次に、社会課に行きました（41 歳）。ゴミ処理、墓地の問題、野犬掃討、それから町民の健康管理に関することを担当しました。そこで初めて課長補佐に発令されて、管理職になりました。

野犬掃討は、「放しちゃダメだよ。3 m 以内に鎖でつないでおきなさい」と条例で決めているのに放す人がいて、子どもに噛みついたり、畑を荒らされたりするという苦情が来るものですから、やむを得ず、麻酔銃を持って行って、野犬を殺しました。首輪がついていても放したら野犬ですから。それで、11 月 7 日に釧路保健所に管内の担当者が集まって、「犬魂祭（ケンコンサイ）」をしました。犬の魂にみんなでお参りました。

野犬掃討も大変でしたが、一番嫌だったのは精神病患者の収容に関することでした。

人間が人間を収容するというのは、大変なことでした。精神病患者がいる家族からは、「もう暴れて、暴れて、プロパンガスのホースは抜くし、ガラスは破るし、玄関の戸は蹴っ飛ばしちゃうし、なんとかしてくれ」と連絡がきます。そしたらこっちも、「ばあちゃん、おれらも叩かれていられないから、もし暴れたらこっちも抑えるけれども、それでいいかい」と言ったら、「いや、どんなことでもいい。殺してもいいから、連れていってくれ」と言うのです。「じゃあ、よし、わかった」と言って、僕は課長補佐でしたから担当の係長に「おい、行くぞ」と言って連れて行きました。到着すると、もう、いろいろぐちゃぐちゃになっていました。「お前、具合が悪いんだろ。病院に連れて行ってやるから行くべ」と精神病患者を説得して連れて行きました。車に乗せて、病院までの距離が長いこと、長いこと。「早く着かないかな」と思いながら連れて行きました。

そうやって、精神病患者を収容したことがあります。何人もいます。結構うちの町は多かったです。あるときは、係長に「おればっかりいつも行かないといけないから、たまには自分たちだけでやってこい」と言って、若いのを一人つけてやって行かせました。それでその二人が行ったら、畳に「ドン」と出刃包丁を刺して、「なあんだ、お前ら」と寝間着を着たまま威張られて、係長たちは青くなって戻ってきてしまいました。「補佐、おれたちの手に負えないわ」と。「なんでそんなことを。お前らの仕事でないか」と言いましたが、「いや、出刃包丁を刺して威張ってるんだ」と言うので、「よし、おれが行くか。やっぱりやくざが出なければダメか」ということで、今度は僕がメガネから時計から全部外して行きました。

さっき言ったように、親にちゃんと断っているから、「お前、なんだ！」と言われても、「お前なんかもクソもないぞ！お前なに言ってんだ。みんな、病院に連れて行くと言ってるのに、この野郎、いい加減にしろ！」と家に上がりますと、「なあに、この野郎」と出刃包丁に手をかけたものですから、いきなり蹴っ飛ばしました。ところが、相手は食事もろくにしておらず、薬もろくに飲んでないものだから、もうヘナヘナでした。口ばかり達者なんです。「なにー」と気合かけたら、すぐに「わかった、病院に行けばいいんだべ」となっていました。「初めからそうやって言えばよかったろう」と、

そのようなことが社会課の時代にありました。これが一番嫌でした。

その後のキャリア

それから、その仕事から今度は、社会体育課の課長になって（43歳）、それから、社会教育課長に戻って（47歳）、つぎに教育委員会の管理課長という教育長の下で No.2 になりました（51歳）。

そして、今度は観光課長になりました（55歳）。ここ（道の駅しらぬか恋問「恋問館」）のテープカットをやった



社会教育課長時代
1985（昭和 60）年

のは僕です。7月5日にオープンするのに、7月1日に人事異動がありました。それから、今はペンペン草が生えていますが、向こうに舟券（フナケン）の場外売り場がありました。安芸の宮島が本場なのですが、おかげで、宮島に3、4回公務で行って来ました。それから、競輪の場外車券売場もあり、新潟県の弥彦村にも視察に行きました。

当時は、東京に行って、まず宮島に行き、仕事を終えて東京に戻ってきたら、旅費がもったいないからそのまま東北新幹線で弥彦に行く、そういう仕事をやっていました。町民の反対もあっていろいろ揉めましたが、なんとか形になって完成しました。

そして、さっきの町長が今度は「消防に行け」と言いました。そして、西部消防組合（当時の音別町、白糠町、鶴居村、阿寒町の4町村で組織）の7代目消防長になりました。消防なんて全然経験ないのに、「行け」と言うものだから、「まあ仕方がねえな」と思って行きました（56～58歳）。家で鏡を見ながら敬礼の仕方を何回練習したかわかりません。それから、月1回、消防長点検というものがありました。職員がみんなダァーッと並んで、「気をつけ」と。赤い車は絶対に運転させてくれませんでした。全部、運転手つきで乗っていました。そしたら、近所の連中が、「なんだ、偉そうに。運転手つ

きで後ろに乗って歩いていやがる」と言うものですから、消防に「家の傍に赤い車を持ってくるな。どこか行くときは、おれがちゃんと消防まで行って、消防から赤い車に乗っていくから、家に絶対来るな。もう、隣近所がうるせえから」と言って来させませんでした。そんなことを消防で経験しました。それから、消防は男ばかりの職場でしたから、非常に人間関係が悪くて、もう大変でした。「お前行って、なんとかせい」と町長に言われていたので、だいぶなんとかして、みんな仲良く仕事するようになったものです。



消防長時代
1994（平成6）年

そして、消防から特別職の収入役を2年ほどやりました（58～61歳）。この仕事は、月給65万円なんです。「こんなにもらっていいんだろうか」と思いました。なんてことない。小切手に判を押すだけです。役場が払うお金が1億なんぼとあるのですが、それにチェックライターでガチャガチャとやってポンと判を押す。それだけで65万円。町長に「たった1枚にポイと判を押すだけで、こんなに金貰えるってのは高過ぎるんじゃないか」と言ったのですが、僕が下げたらNo.2から町長から全部下げなければなりませんので、僕だけ給料を下げるわけにはいきませんでした。

4. おわりに：サミュエル・ウルマン「青春」

今振り返ってみると、働きながら定時制高校へ通ったり、炭鉱で働いたことは、「頑張る力」や前向きな精神を自分の心のなかに植え付けくれたのだと思います。また、炭鉱では自然発火の話のように「いつ死ぬかわからない」という恐怖感が常にあり、まさに命がけの事態を経験したので、「どんなことでも負けないでやれるぞ」という自信はつきました。

それから、妻には経済的な部分も含めて、非常に助けられました。妻は庶路炭鉱病院の看護師をやっていて、そこで出会ったのですが、二馬力で働いたので助けられました。また、炭鉱での仕事は、深夜勤務もあったので、大変な苦勞をかけたと思います。あまり言うとその気になるから、この程度にしますが（笑）。

そんなところで、もう 12 時を過ぎましたので終わりにしますが、最後に僕の好きな詩を紹介して終わりにしたいと思います。みなさんには釈迦に説法だろうと思うのですが、サミュエル・ウルマンというアメリカの詩人がおります。ドイツ生まれのアメリカ育ち、ユダヤ系の人らしいです。この方が書いた詩のなかで、僕が大好きな一節があります。非常に長いので、そのなかの「青春」という詩を朗読したいと思います。お聞きいただきたいと思います。



新婚旅行、妻信子さんと
1962（昭和 37）年

青春とは人生のある期間を言うのではなく、心の様相(ようそう)を言うのだ。

年を重ねただけで人は老いない。理想を失うときに初めて老いが来る。歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ。

人は信念と共に若く 疑惑と共に老いる、
人は自信と共に若く 恐怖と共に老いる、
希望ある限り若く 失望と共に老い朽ちる

（邦訳 岡田 義夫）

この詩が大好きで、よくいろいろな講演会や青年会で引用して、みなさんに紹介しています。私の大好きな詩です。それではお話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

— 拍手 —



講演の様子

2015（平成 27）年、笠原撮影

参加学生の感想（順不同）

- 炭鉱マン／公務員両方の角度から炭鉱をみることができてよかった。数多くの雑談からも当時の職場の雰囲気を感じることができた。自分が寝ずに聞くことのできる数少ない興味深い話でした。
- これまでインタビュー集などで証言を読んできたのは、太平洋炭鉱で定年まで勤め上げた方のものでした。ですので、実際に閉山によって炭鉱マンからほかに移った方のお話を伺うのは初めてで興味深かったです。立坑の完成時に、「100年もつ」とうたわれた庶路炭鉱が、実際は3年で閉山に追い込まれてしまったという事実。やはり尋常ならざるように思います。会社側の認識不足か、政府の転換があまりにも急だったのか、どちらなのでしょう。閉山後に5つできたという新会社は、成果をあげられたのでしょうか。
- 住谷さんの仕事の軸は、まず第一に家族を養えるかどうかにあったのだなと思いました。その一方で、学業を諦めない面や、労働しながら生徒会長を務めていた面もあり、自分の責務と自分のやりたいことを両立されていて尊敬しました。“庶路100年の体系”だと言われていたのに、立坑の完成からわずか3年で閉山が決定したとき、住谷さんが抵抗されたのを聞いて、炭坑夫としてのプライドを捨てたくなかったのかなと考えました。住谷さんの半生は、家族のためにささげた炭鉱という仕事がいかに自らのアイデンティティだったかを物語るようでした。
- 資料の中でみていた炭坑夫の方の生活や生き様を実際に本人から聞けるということがとても印象に残りました。やはり、文字を見ているだけでは伝わってこないリアリティーがひしひしと住谷さんの雰囲気や喋り方からも伝わってきて、改めて炭鉱について学んでいることを実感しました。炭鉱は大手で高給でみんなが望む仕事だと思っていましたが、話を聞いてそれに勝る危険があるのだなというのが印象に残りました。
- 住谷さんは若い頃から長い間ずっと炭鉱で働いている方で、声の出し方とか話し方に迫力があって、「炭鉱の男」という感じがした。話の中で一番印象に残っていることは、何気なく話してくださった事故の話で、悔しい気持ちとか、やるせない気持ちが伝わってきた。炭鉱の男たちは、やはり命をかけているだけあって、毎日、「明日死ぬかもしれない」という気持ちでやっていて、だから、毎日全力で生きていたし、その奥さんや子どもの気持ちを考えると何とも言えなくなった。
- 中学生の頃にお父さんを亡くして、それ以来、家族を支える一心で必死に働こうとする姿勢はすばらしく、格好良いなと感じました。今の自分よりも若い年齢のときに思い切って職場を変える決断をし、その過程で社長に止められる人間模様などは、普段の学習では決して知ることのできないもので、極めて貴重なお話でした。

- ・ 住谷さんの人生において、炭鉱は切っても切れない存在だと思った。中学3年生にして幼いきょうだいを養うため、鉄工場に就職するという大きな決断や、自分の命が危険にさらされると知っていて、かつ、社長に反対されながらも坑内に入る勇氣に感銘を受けた。また、非常に危険な坑内で一度も怪我されなかったという話も衝撃を受けました。
- ・ 長男としてきょうだいを守るために、中学卒業後、働きながら定時制の学校に通い、炭鉱マンとして庶路炭砦が閉山するまで勤め上げた住谷さんの人生や、常に前を見て一つひとつ岐路に向き合う姿勢に感銘を受けました。特に、保安部長に就任した際の病院でのエピソードが印象的でした。会社側の損得よりも、労働者一人ひとりの安全を第一に考えた経営が、炭鉱を支えていたのだと思いました。
- ・ 住谷さんのお話を聞いて、当時の炭鉱マン同士の強い「仲間意識」を感じることができました。組合の団結力の堅さ、特に、政策転換闘争は警察の出動事態にまで発展する激しさは、その仲間意識の表れであったと思います。住谷さんは組合の執行部や保安部長を務められたということで、常に労働者を守る立場に立っており、炭鉱の仲間への「思いやり」や「義理」というのがとても強かったとのだなと感じました。また、50年以上も前に知り合った方々と今日でも良好な関係を続けていらっしゃるということに対しても周囲の人びとへ常に思いやりをもって信頼関係を保ち続ける住谷さんのお人柄を感じることができました。
- ・ 終始、住谷さんのエネルギッシュさと波乱万丈なエピソードに引き込まれました。特に印象的だったのは、炭鉱に入る際に相当な覚悟が必要だったということです。間近で重症の炭坑夫が運ばれる様子を見たり、鉄工場の上司に危険だと引き留められたりしたことで、できるだけやりたくない仕事だと感じていたことがわかりました。それでも、きょうだいを養うためには仕方がないと決断できた点に、現在との時代状況の違いを感じます。また、当初、定時制高校を卒業するために、2番方を免除してもらえたという話も印象に残っています。意外にも自分の意見をきいてもらえる職場だったのだなと感じました。もしも同じ頼みをほかの職場・ほかの炭鉱でしていたら、どのような対応をされたのだろうかと気になりました。もう一つ、衝撃を受けたのは、労働組合の力の強さです。自殺を図るほど、経営陣にとって労働組合の対立が脅威であったことに驚きました。いかにして、庶路炭砦の労働組合がその力を付けていったのかという過程についても、もう少し詳しく追いたいと思いました。
- ・ 印象に残ったのは、住谷さんが幼いきょうだいたちを守るために、危険と知りながらも炭鉱で働き続けたことである。お父様が若くして亡くなられたことで、長男である自分が家族を支えなければ、と思われたときの覚悟は、相当のものだったのではないだろうか。また、炭鉱での労働だけでも命の危険と隣り合わせの環境で疲れるであろうに、それに高校での勉強や生徒会をも両立させていたことは大変驚いた。その能力が、住谷さんが役場のどの部署に配属されても大丈夫であったことにつながっているのだろうと

感じた。

- ・ 住谷さんの講話から、彼はいつも人生の困難に積極的に向き合っていることを感じた。家族を養うために炭鉱での就職を決めたこと、高校と仕事を同時に進めていたこと、または役所に入ってから資格を取るために勉強すること等から、私たちが学べる点が多い。年齢と経験を重ねているときに、いつも精神的な若さと信念の強さを保つことができる住谷さんに感心した。
- ・ 鉄工会社を辞めるときに、社長から言われた「炭鉱なんてそんな危険なところになぜ行くんだ」という言葉が、まさに当時炭鉱が人びとにどう捉えられていたかを象徴していると感じた。また、職場の人びとに学校に行かせてほしいと説得する場面では、「みんな行っていないから行くな」ではなく、「みんなの分も頑張って行ってくれ」と言える関係だったことに驚いた（最近の出産のために休む人に風当たりが強くなるような風潮とはまるで正反対だと思った）。
- ・ 父親を亡くされ、きょうだいのために自分が犠牲になって働こうと決めた、という点が印象的だった。働きながら、夜間学校に通い続ける意志の強さに感銘を受けた。仲間やヤマのために体をはって走り回る住谷さんは、まわりの人びとから兄貴分のように慕われていたのだらうと思った。明るくはっきりとした性格ゆえか、閉山に際してあまりワサワサしていなかったように見受けられたが、落ち込んで気が滅入ったりしなかったのだらうか。本当に頼れる兄貴分だったのだらうなという印象が強い。
- ・ 炭鉱で働くことになった経緯を細かくお聞きすることができました。お父様が亡くなり、多くのきょうだいを自分が支えなければと働くことを決めた住谷さんは、責任感の強い方なのだと感じました。また、転職し、炭鉱で働くとき、下請け会社の社長との話が一番印象に残っています。「危険なのに、なぜ炭鉱に行くのか」と聞いた社長に、「家族のために炭鉱に行く」と住谷さんが決めたとき、やはり、当時の炭鉱の給料や福利厚生が、ほかより良かったのだと、改めて感じました。また、高校と炭鉱の3交代の両立の話も印象に残りました。2番方だと学校に通えないというあたりの話から、炭鉱マンの仲間意識の強さを感じました。
- ・ 住谷さんが炭鉱に入った理由は、きょうだいを養うためだと仰っていました。炭鉱は危険な仕事だけれど、給料が高いことを理由に選ぶ人が多いのだと思いました。炭鉱で鉱員として働いていた人にはどのような理由で入った人が多いのか勉強したいと思いました。住谷さんは炭鉱で働きながら定時制の高校に通っていたと仰っていましたが、炭鉱で働くのにもものすごく体力を使うのにすごく大変な思いをしたのではないかと感じました。学校に通うために2番方を免除してもらうなど、周りの協力があつたと聞きましたが、私のイメージで炭鉱マンは勉強などをあまりしないと思っていました。しかし、勉強に励む仲間を応援する人ばかりで、仲間を思う気持ちが強いのだと思いました。

- ・ 住谷さんの学生時代からの一連のエピソードなどから当時の鉄工所・炭鉱労働者の人間関係のあり様をうかがい知ることができて、非常に有意義な体験だった。定時制高校を卒業するために、職場に便宜を図ってもらった話など、住谷さんが周囲に働きかけ、それに住谷さんを取り巻く人びとが応えるという関係性に美しさを感じた。制度や規則で硬直化していない、柔軟な職場のあり方、人対人の本来のコミュニケーションのあり方を垣間見た気がした。
- ・ 家族のために、自分が危険な職場に入るという決断は、当時高校生であった住谷さんにとって非常に荷が重いものであっただろうと感じました。勤めていた鉄工場を離れ、炭鉱に入ることを社長に伝えたとき、強く引き留められたというお話を聞き、それだけ当時炭鉱で働くことは危険な仕事であったのだと改めて考えました。炭鉱マンとして誇りを持っている方々は多くいらっしゃると思いますが、はじめは金銭や生活のために入社を決める人びとも少なくないのであろうと感じました。
- ・ 学生時代のお話などもふまえながら半生をお話して下さり、当時の様子などが大変理解しやすかったです。炭鉱の危険さ、人間関係など、興味深い話が多かったです。住谷さんも大変おもしろく、フレンドリーな方で楽しかったです。
- ・ 若い頃から炭鉱で働いていらっしゃり、その長い期間でのさまざまな経験を話して下さったので非常に多くの話を実際に聞くことができて興味深かったです。庶路炭砒では閉山時に新しい企業が設立され、従業員の雇用が確保されたという太平洋炭砒との違いが印象的でした。
- ・ 資料の文字情報でしかなかったものが、実際に庶路炭砒で働かれていた住谷さんのお話を聞いたことで、「あ、本当にそうだったのか」という答え合わせをするかのような気分になりました。太平洋炭砒だけでなく明治庶路炭砒もやはり住宅手当、電気・ガス・水道代…と厚生手当がよかったということ、また、庶路は 100 年大丈夫だろうと言われていたこと…、また、そのような中で、住谷さんの周りに流されない、ぶれない考え、行動力、そして周囲からの信頼というものを感じました。常にお話にオチがあり非常に面白く、ずっと聞いていたいと思える素敵なお方でした。
- ・ 自分自身がこれから社会に出て働くということもあり、住谷さんの「働く姿勢」について印象に残ったことを書かせていただく。住谷さんが炭鉱に就職した背景には、9 人きょうだいの長男、家族を養うことであった。働いて家を支えるという使命と自分自身の将来のために、夜間学校と炭鉱の毎日に明け暮れていた。通気の仕事へ進んだことも、「死んだら死んだでしょうがない。きょうだいはもう巣立っていたし」という言葉から、大変家族想いの方であると感じた。炭鉱を退職して公務員になった後も、数々の資格の勉強をなさり、大変苦勞されていた。「公務員は本当に仕事をしないね」という言葉も、炭鉱を経験されたからこそそのものであるように感じ、公務員の仕事が面白くなく

でも尽力できたのは、住谷さんの“人”に対する貢献の表れだと感じた。

- ・ 炭鉱で働くことになった理由として、親父さんが亡くなり、きょうだいを養うためということで、住谷さんは常に家族のことを思いながら働いていたのだろうなと思いました。明治庶路が閉山したとき、正直ほっとした気持ちもあったとお聞きして、それが一番印象的でした。閉山というと、職を失うというマイナスイメージしかなかったけれど、炭鉱という厳しい労働環境の中で働かなくてもよくなったという安心の気持ちも少なからずあるのだということがわかりました。
- ・ 炭鉱に勤めたのが7年強と役所に勤めた期間の約5分の1にも関わらず、鮮明な記憶が残っていたことに驚いた。いかに住谷さんにとって炭鉱で過ごした日々が印象深いものであったかがわかる。ケガ人が出たとき、治療をめぐって住谷さんと事務方の人が対立した話、また、住谷さんの高校卒業のために周囲が理解を示して、2番方を免除された話からは、ヤマの男のつながり、絆の深さを感じられた。住谷さんは結果的に閉山とともに公務員へと転身することができたが、それはかなり珍しいパターンだったのではないだろうか。庶路炭砒の再就職の状況が気になった。
- ・ 住谷さんのお話は、自分の半生を含めた石炭についてのお話でした。一番印象に残っていることは、自分が炭鉱で働いていたことを誇りに思っているなと感じたことでした。また、炭鉱が危険であることを承知で幼いきょうだいを養うために、炭鉱で働かなくてはいけなかった人もいたことを知りました。太平洋炭砒は庶路と違い、請負給制ではなかったなので、これも太平洋が最後のヤマとなった要因の一つだと考えられました。

明治鉱業庶路炭業所（庶路炭鉱・本岐炭鉱）について

石川孝織

明治鉱業は地方財閥であり、麻生・貝島と並ぶ「筑豊御三家」の安川財閥の中核として、九州を中心に鉱山・炭鉱を所有していた。戦前期、朝鮮半島・中国大陸、そして北海道へと展開する中で、釧路炭田には昭和10年代になって三井・三菱系財閥にやや遅れて進出した（三井＝太平洋炭鉱・1920年～、三菱＝雄別炭鉱・24年～）。

1936（昭和11）年に試掘鉱区を設定、38年に庶路開発所を設け準備を進め、翌39年に開坑した。さらに40年に庶路開発所を庶路炭業所とし、41年から庶路炭鉱として採炭を開始した。また同年には明治鉱業は庶路本岐炭鉱から本岐炭鉱を買収する。43年には両坑で約16万トンを生産したが、釧路炭田の他の炭鉱と同じく、44年8月に樺太及び釧路地区炭鉱整備要綱（「急速転換」）により庶路炭鉱は保坑、本岐炭鉱は休坑となる。終戦により庶路炭鉱が、本岐炭鉱も1946（昭和21）年に再開される。49年には両炭鉱は合併となり、庶路炭業所庶路坑・同本岐坑となる。

戦後、庶路坑は出炭能率が低迷した。理由として断層が多いなど地質条件だけでなく、「機械化の進め方と積極性に劣り、戦前の方式を脱しきれなかったことにある」¹。ホーベル導入が第二卸出水事故（57年）で中止となり、また積込機械の導入も遅れ人力への依存が続いた。いっぽうで、56年から立坑の開削が開始され61年に完成するなど、近代化・機械化の取り組みも進められつつあった。しかしその効果は余り得られないまま、62年には石炭鉱業調査団（有沢調査団）による閉山示唆、切羽条件の悪化と切羽展開の遅れなど「庶路炭鉱閉山」の流れが加速する。町ぐるみでの閉山阻止運動、労使の「再建協定」により生産効率の向上を図るとともに、労組は「閉山白紙撤回」「完全雇用」闘争を展開するが、64年1月5日、明治鉱業から労組へ正式に閉山提案があり、また炭労による調査団も「閉山やむなし」としたことから「完全雇用」のみへ方針転換、同年1月31日に閉山した。開坑からの年間最大出炭量は63年の35.2万トンであった。

「明治庶路炭鉱史」では、庶路炭鉱の閉山の理由（「明鉱本社が第一次答申案で庶路炭を閉山に組み込んだ理由」）として、次の5点を挙げている。

- ① 慢性的な赤字から脱却できなかったこと
- ② 将来のドル箱として意欲的な設備投資を行った結果が出てこなかったこと
- ③ 1957（昭和32）年発生した第二卸大出水事故により大きな影響を受けたこと
- ④ 労使関係が正常でなかったこと
- ⑤ 最大の理由は断層が多かったこと

¹ 庶路炭鉱史発刊編集委員会、1987、『明治庶路炭鉱史』p.104.

閉山にあたって、明治鉱業は明治ブリケット、明治段ボール、信和産業、明治林業庶路事業所、明建製作所道東工場の会社・事業所の新設、明豊運輸、明治交通、明豊観光不動産など明治鉱業系企業による、746人もの再雇用計画を労組に提案した。労働者の「完全雇用」がほぼ達成されたことも特筆すべきことであろう。

なお本岐炭砒は 1961（昭和 36）年、庶路砒業所から分離され本岐開発事務所となった（64 年から本岐砒業所）。62 年からは水力採炭が行われ、高効率炭砒として評価されていた。庶路炭砒の閉山後も 5 カ年の期限付きで操業、69 年に閉山している。

参考文献

- 明治鉱業株式会社社史編纂委員会（1957）『社史 明治鉱業株式会社』
白糠町史編纂委員会（1983）『白糠炭田に灯は消えず』叢書しらぬか第 5 巻
庶路炭砒史発刊編集委員会（1987）『明治庶路炭砒史』

解題：「炭鉱マンから行政マンへ」から学ぶこと

笠原良太

1. 講演「炭鉱マンから行政マンへ」

本講演は、早稲田大学文学部社会学コース嶋崎ゼミの2015年度フィールドワークにおける最初のプログラムであった。早朝便で釧路空港に到着した学生たちは、やや睡眠不足の状態に着席したが、住谷正治氏の話が始まるや否や、背筋を伸ばし、終始聞き入っていた。住谷氏の迫力ある声と臨場感あふれる話し方、そして、多くの登場人物とのやり取りの詳細な描写は、学生たちを魅了した。その臨場感と迫力は、講演録として文字になってもなお、読者に伝わったのではないだろうか。

講演の前半（第1部）では、住谷氏が炭鉱マンになるまでの「激動の10代」を振り返っている。特に、父親の突然の死と鉄工所への就職について振り返り、15歳で父親の代わりを務めた葛藤の時代を振り返っている。講演の中盤（第2部）では、炭鉱での仕事と定時制高校生活との両立について振り返っている。高校では生徒会長を務めた経験、炭鉱では死と隣り合わせの労働や労働組合での活躍が詳細に振り返られている。そして、講演の終盤（第3部）では、閉山後に行政マンとして再就職してからの話が語られている。

住谷氏の話は、炭鉱や役場での仕事に関する内容にとどまらず、人生のダイナミックス、人生と社会の関わりといった大きなテーマにまで及んでいる。氏は講演の最後に、「定時制高校へ通ったり、炭鉱で働いたことは、『頑張る力』や前向きな精神を自分の心のなかに植え付けくれた」と振り返った。「いつ死ぬかわからない」炭鉱での仕事を終え、眠気を堪えながら高校に通学した経験は、氏の人間行為力（agency）を向上させ、予期せぬ社会的出来事を乗り越える原動力となっていた。

このほかにも、住谷氏の話からは、人間行為力を向上させていく過程がうかがえるが、当時の時代状況や歴史的コンテクストを把握する必要がある。以下では、氏の半生において転機となった、「中卒時の進路選択」から「炭鉱への就職」、「閉山後の再就職」を、多層的なコンテクストに位置づけ、氏の半生のダイナミックス、人間行為力向上の過程を探りたい。

2. 住谷氏の半生と社会的コンテクスト

（1）1950年代における中卒就職

住谷氏は中学校卒業後、樋田鉄工所に就職した。15歳での就職は、今日の高学歴化社会からみれば、早期の職業移行に見えるが、当時の時代状況ではとりわけ早くはなかった。氏が中学を卒業した1953（昭和28）年における北海道内の中卒後高校進学率は

48%、就職率は41%と、中卒後就職も主要な選択肢であった²。まして、全日制高等学校がなかった当時の白糠町では、中卒後就職という選択が標準的な選択肢であったことは容易に想像できる³。住谷氏自身も中学校卒業後に就職するという進路を描いており、したがって、中卒後就職は予期された選択であった。

ただし、氏にとって庶路で就職するという選択は、予期されたものではなかった。当時、地方の中卒者が大都市圏の工業地帯に集団就職する、いわゆる「金の卵」現象が起き始めたころである。住谷氏も中卒後は、「絶対に家を出てやる」と、遠く離れた地域での就職を希望していた。しかし、中学卒業間近に父親が他界し、「もう自分の人生真っ暗…」となった。最終的に、「幼いきょうだいを大きくするためには、自分が頑張っていかなければならないな」と、長男としての役割を自覚し、庶路の鉄工所に就職することになった。

したがって、住谷氏の進路選択は、中卒後就職という点では予期できる標準的な選択であったが、庶路での就職、そして、子どもから父親の代わりとなったことは、予期せぬ出来事だったといえる。しかし、住谷氏はその後、単に父親の代わりを遂行するだけでなく、いくつもの行動場面に入り込んでいくことで、人間行為力を向上させていくことになる。

（２）高卒学歴の取得と人間行為力の向上

住谷氏にとって父親の代わりとなった経験は、「様々な葛藤があった」経験であった。家族を養うために日曜も出勤し、残業もしたという。しかし、氏は鉄工所社長の勧めもあって、定時制高校に通いはじめた。子どもから父親の代わりとなった役割移行を見事に達成しただけでなく、仕事と学業を両立するという選択をしたのである。

住谷氏が進学する前年の1952（昭和27）年に町立北海道白糠高等学校定時制夜間普通課程（1学級）は、定時制普通課程（昼間4学級）に附設された⁴。当初住谷氏は、「残業してお金が欲しかった」、「たいして勉強したくなかった」ために渋々通学していたというが、同級生の多くが中退していくなか、最後まで仕事と高校生活を両立させ、1957（昭和32）年に高卒学歴を取得した。

この当時の高卒学歴は、どのような意味を持っていたのだろうか。前述のとおり、当時は高校進学率が5割に満たない時代であった。今日では、高校進学率が9割を超え、4年制大学進学率が5割を超えていることから、当時の高卒学歴は、短大など高等教育機関卒

² 文部科学省, 1952-2015, 「学校基本調査 調査結果の公表 卒業生進路等 中学校」(北海道総合政策部情報統計局統計課 <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/tuk/013sbs/> 2016年4月14日取得)。

³ 1953年時の道内市町村別学校基本調査データは取得できていないため、北海道データに基づく推測にとどまる。

⁴ 白糠町史編集委員会編, 1989, 『白糠町史（下巻）』 p.159.

業レベルの学歴であったといえる。実際、閉山後の再就職の際に、この高卒学歴が大きく効果を発揮することになった。

ただし、住谷氏の高卒学歴は、単なる学歴効果だけでなく、人間行為力を向上させたという点で人間発達上の大きな効果を有しているといえる。氏は高校で年齢や境遇も異なる多様な人びとと共同生活を送り、生徒会長も務めた。また、白糠町における勤労青少年教育の推進運動「働こう学ぼう運動」⁵の先駆けとなる活動を展開し、地域社会と積極的に関わる経験を有した。当時の様子をうかがう限り、教員や友人、町民から大いに頼りにされていたことが伝わってくる。氏は、職場だけでなく高校、地域社会も含めた新たな行動場面に入り込み、適応していくことで、その後の人生の糧となる人間行為力を獲得していたのである。

（３）庶路炭砦への就職と閉山タイミング

その後、住谷氏は高校３年次に庶路炭砦へ転職した。転職した１９５６（昭和３１）年は、ちょうど全国的な石炭産業の不況期であったが、庶路炭砦は、同年から立坑の開削工事を開始していた（「明治鉱業庶路炭砦解説」参照）。住谷氏によれば、「会社の幹部は、『これでこの炭鉱の存続は、１００年は間違いない』というふうに豪語した」という。氏の炭鉱への転職は、当時の白糠において給与や福利厚生の面でも、将来性の面でも望ましい選択であった。さらに、家族を養う立場にあった氏は、炭鉱への転職が必然的な選択であった。

しかし、庶路炭砦は、１９６２（昭和３７）年に石炭鉱業調査団の第一次答申によってスクラップが示唆され、１９６４（昭和３９）年１月に閉山した⁶。３億円を投じて建設された立坑は、わずか１年間でその役目を終えた。住谷氏は、当時の町長の誘いもあり、白糠町役場に就職することになった。このスムーズな再就職は、氏の社会関係や人柄によるものといえるが、庶路炭砦の閉山タイミングによってもたらされた結果だったと捉えることもできる。

庶路炭砦の閉山は、当時としては稀有な「完全雇用達成の閉山」であった。炭鉱の閉山といえ、筑豊に代表されるように、多数の中小零細炭砦の閉山によって大量の失業者が滞留したり、あるいは、大都市圏から離れた石狩などの産炭地では閉山後の人口流出が目立ち、山元の経済に大きな影響を及ぼすものであった⁷。白糠町でも庶路炭砦閉山前の予

⁵ この運動は、定時制教育振興会（１９５７年１１月発足）のもと、「町を家庭を豊かに明かるく築く、青少年がこぞって学ぶ運動」として行われた教育推進運動である。すべての町民に高等学校卒業程度の学力を身につけさせることで、高度化する社会に適応し、個人・家族の生活向上、町全体の発展を目的とした。「働こう学ぼう運動」という呼称が用いられたのは、１９６１（昭和３６）年度以降だが、住谷氏が在学中からその先駆けとなる活動が行われていた。なお、住谷氏は昭和４２～５５年度にかけて同振興会の副会長を務めている（以上、創立２０年史編集部，１９６９、『北海道白糠高等学校創立２０周年記念協賛会』p.65-68、創立五十周年事業部編集委員会，１９９９、『北海道白糠高等学校 創立五十周年記念誌』p.114-116.）。

⁶ 白糠町史編集委員会編，１９８９、『白糠町史（下巻）』p.818.

⁷ 矢田，１９９５，「石炭産業」産業学会編『戦後日本産業史』p.1005.

想では、多数の失業者と人口流出が生じて地域経済活動が停滞することを懸念していた⁸。

しかし、庶路炭砦労働組合は、「強い」労働組合であり、炭鉱の再建が難しいと判断してからは、雇用問題に焦点を当てて会社と交渉を続けた。さらに、道炭労や白糠町行政と連携し、組織、地域ぐるみの交渉を続けた。その結果、明治鉱業株式会社系列5企業が設立され、完全雇用が達成された。

これにより、町外への人口流出は最小限にとどまり、地域経済への負の影響も最小限に抑えられた⁹。白糠の地域社会は、大幅な縮小を免れ、氏が町役場に再就職する余地が確保されたとみることができよう。同じく釧路炭田に位置し、閉山によって地域社会の維持が不可能になった尺別や雄別の事例（両炭鉱とも1970年に閉山）と比べれば、庶路炭砦の閉山が有した地域社会への短期的・直接的影響は最小限に留まったといえる。

こうした企業や地域のコンテクストに加えて、氏が高卒学歴をすでに取得していたこと、多様な社会関係を構築していた20代半ばに閉山を迎えたというタイミングが、行政マンとしての再就職を可能にしたといえる。

3. 住谷氏の半生から学ぶこと

再就職後、住谷氏は高校生活や炭鉱マン時代の経験を活かして、行政マンとしても活躍した。15歳で父親の代わりとして働きながらも高校に通った積極性は、行政マン時代の社会教育主事資格の取得や「道民の船」釧路分団長を務めるといった姿勢に見られる。また、住谷氏は炭鉱マン時代の「いつ死ぬかわからない」、「まさに命がけの事態を経験」したことによって培われた「『どんなことでも負けないでやれるぞ』という自信」をもとに、社会課での厳しい職務も全うできたという。10代後半から20代半ばにかけて父親の死と炭鉱の閉山を乗り越えた経験は、その後の氏の人生に大きな肯定的影響を及ぼしたといえるだろう。

また、後日の補足的なインタビューでは、氏の人生にとって、妻信子さんとの出会いとその後の夫婦生活が大きな意味を持っていたと振り返った。庶路炭砦病院の看護師であった信子さんは、閉山後、本岐炭砦病院へ異動し、本岐閉山後は釧路市立病院に勤めた。

「経済的にはかなり助けられました」と感謝すると同時に、「炭鉱での仕事は、深夜勤務もあったので、いろいろと大変な苦勞をかけたと思います」と、炭鉱マンの妻に対する感

⁸ 館岡町長らによる明治鉱業本社や炭労関係に対する要請書より（白糠町史編集委員会編、1983、『“叢書・しらぬか”第五巻「白糠炭田に灯は消えず」』白糠町 p.143-145.）

⁹ 炭鉱最盛期の白糠町の人口は、22,589人（1962年）であり、庶路炭砦閉山後は21,413人と大きな減少はなかった。1969年5月の本岐炭砦閉山後も20,424人であったが、1970年2月の上茶路炭鉱閉山後では15,482人と5,000人ほど減少した（白糠町史編集委員会編、1989、『白糠町史（下巻）』p.835.）

謝の念を述べた。氏の半生にとって、学校や職場はもちろん、家庭も欠かすことのできない行動場面であったことがうかがえる。

それでは、今日の学生たちは、住谷氏の講演から何を学ぶことができたのだろうか。今回、講演に参加した学生たちは、1990年代前半生まれのいわゆる「ゆとり世代」である。20代前半の彼らは、住谷氏が自分たちとは非常に対照的な青年期と成人前期を過ごしてきたことに驚きを隠せないようであった（筆者も然りである）。しかし、学生たちの感想からもわかる通り、単なる驚き以上に、非常に多くのことを学ぶ機会となったようである。とりわけ、人がいかに成長・発達し、ダイナミックな人生を歩んでいくのかということ学ぶ機会となった。住谷氏は、家庭や学校、職場などさまざまな行動場面において、その中に入り込み、その場面において求められる役割を遂行してきた。それも、単に遂行するのではなく、さらに新しい行動場面に入り込み、役割を取得・遂行していった。人間発達の定義である「自分の生活を統制している外的環境のさまざまな部分の中に入りこみ、それを支配」することを体現したような半生といえる¹⁰。学生たちは、氏の半生から、個人にはどうすることもできないような大きな社会的出来事に対して、自らの人的資本を活かして、奮闘し、克服できるという個人の強さを学ぶことができた。氏の半生は、今後、学生たちがさまざまな社会的出来事に遭遇し、乗り越えようとしたときの道標となるに違いない。

このように本講演は、幸いにも当初の目的以上に多くのことを学ぶことができる講演となった。改めて、住谷氏が自身の半生を詳細に講演していただいたこと、さらに、住谷氏とわれわれを繋いでいただいた釧路市立博物館学芸員石川孝織氏に感謝申し上げたい。

¹⁰ Urie Bronfenbrenner, 1979, *THE ECOLOGY OF HUMAN DEVELOPMENT Experiments by Nature and Design*, Harvard College. (=1996, 磯貝芳郎・福富護訳, 『人間発達の生態学』川島書店 p.308) .

おわりに

住谷正治氏との出会いは編者の1人である石川が、2012年に釧路市こども遊学館で開催された講座「おひさまゼミナール Let's 地図学」に講師として招かれ、同じく招かれていた白木紘一氏（白木測量社／本岐炭砦出身）から紹介を得たのがきっかけである。釧路市立博物館では「現場で学ぶ石炭基礎講座」を2007年から開催しており、2012年は庶路・本岐両炭砦をテーマとしていたことから、住谷・白木両氏に講話などをいただいた。

住谷氏にはその後もたびたびその鉄工場・炭鉱・町役場などでのご経験を伺い、石川が2012～14年に北海道新聞に連載していた「再発見・釧路炭田」（『釧路炭田 炭鉱と鉄路』として単行本化）にその半生とともに庶路炭砦の歴史を記録すべく、改めての取材を予定していた。しかし掲載予定時期に同氏が入院され、その機を逃してしまった。その豊かな人生経験と、誰よりも核心を得たものであろうその庶路炭砦に関するオーラルヒストリーを活字化できなかったのは、返す返すも残念であった。しかし2015年10月の早稲田大学の嶋崎ゼミ釧路合宿を通じ、同ゼミと釧路市立博物館、JAFCOF（産炭地研究会）により「JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパー」とすることができたことは、地域の学芸員として、また石炭産業研究者の一員として望外の喜びである。

釧路市立博物館学芸員

石川孝織



炭鉱マンから行政マンへ
—元庶路炭砒労組保安部長 住谷正治氏による講演の記録—

(JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパーvol.8)



発行日：2016 年 8 月 31 日



編集：笠原良太・石川孝織・嶋崎尚子

発行者：産炭地研究会 (JAFCOF)

<http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~nakazawa/>



本報告書は、2016～2018 年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究 C)『第4次石炭政策下での閉山離職者家族のライフコース:釧路炭田史再編にむけた追跡研究』(課題番号・16K04111 研究代表者・嶋崎尚子)による研究成果の一部である。